

香

譜

田

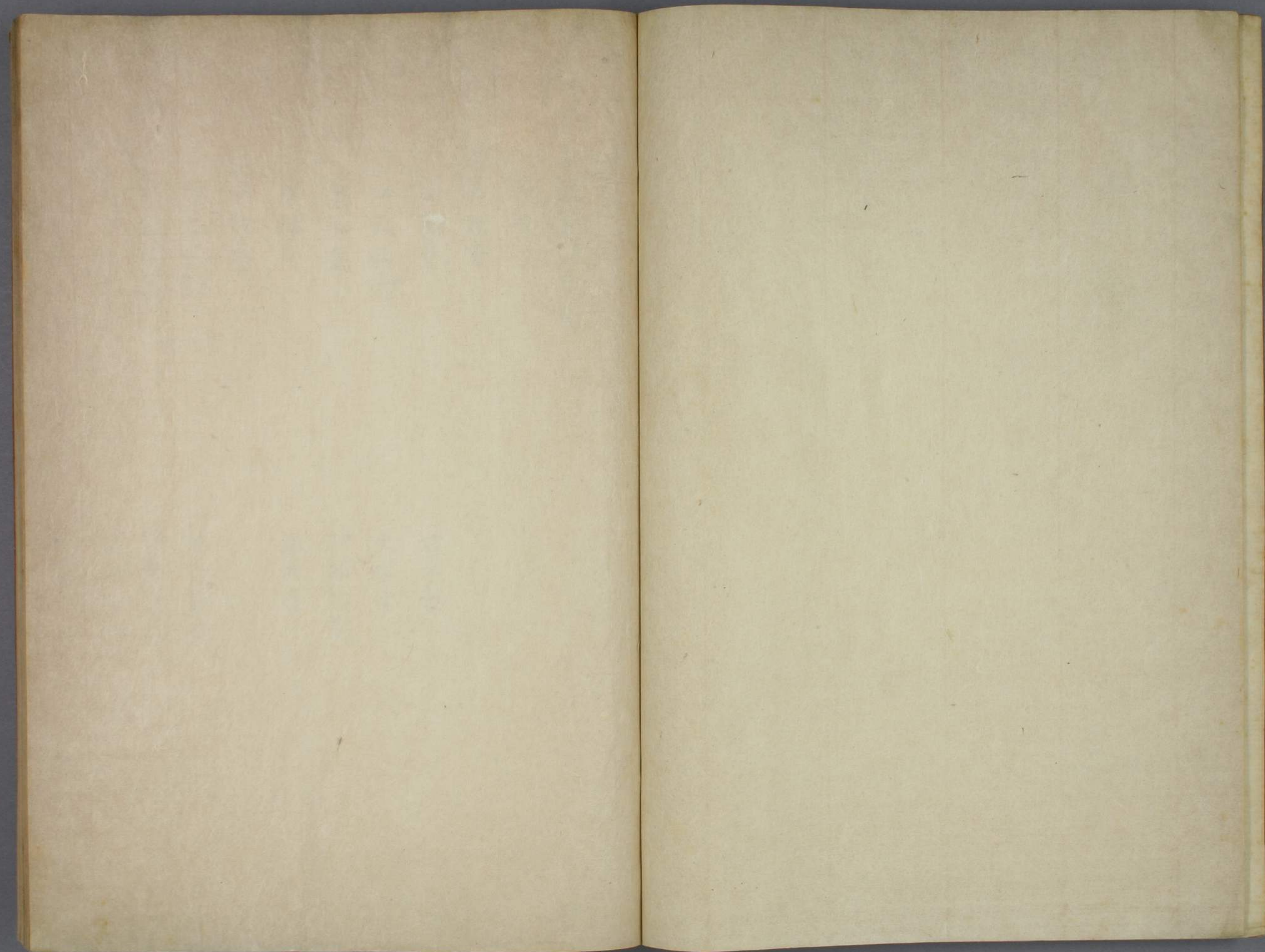
79
808
4



香譜

坤

門	子	刻
編	508	
卷	4	



門
號
卷
808



香譜第四目錄
香事

佛藏諸香

法隆寺

四天王寺

東大寺

万福寺

宮中諸香

焚香見經

焚香誓盟

元正焚香

焚香祭孔子



世尊寺

大安寺

阿弥陀院

法興寺

焚香誓願

御香奉神

焚香祈神

焚香祀佛

香水供佛

焚香祈玉體不豫

車綴香囊

輦車焚香

貝入薰香

金銀橋盛香

銀龜盛香

打枝盛香

金虫盛香

御座焚香

御葬送焚香

賜香祈雨

賜香祈玉體不豫

臨終焚香

帳中綴香囊

車焚薰香

女御入內賜薰香

銀鶴盛香

銀松盛香

鴛鴦盛香

御即位焚香

御食灑香水

焚香接人

上東門院遺香

名香盛手

諸呂賜香

薰爐焚香

貴賤香事

香水深浴

焚香深掌

修法贈諸香

衣宮盛香

贈薰香

薰香作山 島香

闕香

宮中闕香

橋盛香

獻薰香

焚香薰衣

臨終焚香

焚香深髮

焚香禮佛

焚香薰人

貴賤十炷香

合和薰香

僧侶香事

焚香祈雨

香水灑房內

軀體馨香

死時焚香

賜市布施

焚香修法

香水治病

香水避火

薰深線縵

修法賜諸香

賜香_油水



香譜第四

香事

佛藏諸香 法隆寺

法隆寺藏沉水香刻字及烙印

司印一八一

長二尺許徑三寸許有墨書曰

定重十二斤八兩字五年三月四日

天應二年

延曆廿年 十三斤寺斤十斤

天保七年三月假觀之次以今秤

量之重七百八十斤

長日前墨書曰更定廿四斤

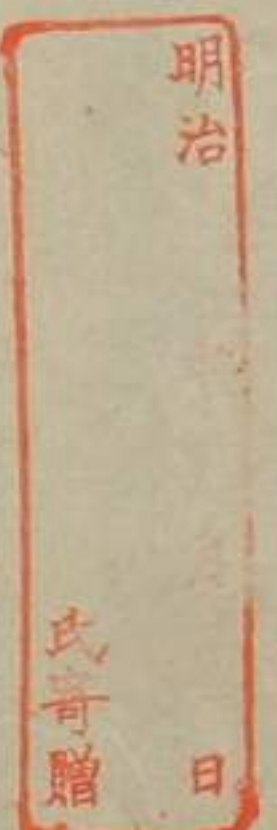
天應二年二月二日更定廿四斤

延曆廿年 定廿五斤

一印

司印一八一

一印



材端徑四寸許書曰葛四斤九兩

今秤壹貫五百文

二材介量蓋並以延曆為心其介則今秤六十文即雜令所詔
小者而大介一百八十文之三分一也大宝撰令已來至延喜
十四年之物實檢皆然刻字必是古韓字烙印必是韓高之所
用並未得讀解墨書中今 [] 者剝落難辨也

沉水香ノ名常ニ沉香ト呼フハ其略稱ノミ本草綱目李時
珍ノ説ニ木之心節置水則沉故名沉水ト云ル是也推古天
皇紀三年四月沉水漂著於淡路嶋其大一圍嶋人不知沉水
以艾薪燒於竈其烟氣遠薰則異以獻之ト見エタルヲ聖德
太子傳ニ太子奏曰是沉水香也此木名旃檀香木生天竺國
南海岸中略即勅命刻造觀音菩薩安吉野比蘇寺時々放光ト

書タルハ欽明天皇紀十四年五月朔河内國言泉郡茅渟海
中有梵音中略樟木渟海玲瓏遂取而獻天皇命造佛像今吉野
寺放光樟像也トアルヲ混一ニテ此説ヲ釀セル歟三百年
前玩香家ノ香譜ノ歌ニ六十一種ノ名香ハ法隆寺東大寺
吉野龍田西大寺ト見エ志野流香書ト云ニ名香ノ第一ヲ
太子ト云一名法隆寺ト注シ又此香木ハ聖德太子是ヲ天
竺ニ得テ此寺第一ノ重宝トス故ニ太子ト名クト云ルト
ト皆推古紀ニ本附テ蛇足ヲ長セシモノ也今此木ハ韓字
及烙印アリ天竺物ニ非ル事知ヘシ按ニ天智天皇十年十
月新羅回ヨリ貢獻スルモノ也紀云九月天皇寢疾不豫十
月新羅進調是月天皇遣使奉沉水香旃檀香及諸珍財於法
隆寺佛此文合セ考フヘキ也今現存文字アルモノニ材文

字ナキ朽木ノ如キモノ一材又小片三五材アリ法隆寺古
今日録抄頭真得業肉書ノ草稿ニ寛元二年入道殿下道家
宝物市覚ノ目錄中沉水香三長二尺許ト見エタリ小片ハ
略キテ計ハサリシニヤ○字五年云々ハ天平宝字五年ノ
量定ト云事也東大寺三倉ノ古書中法師道鏡手翰ニモ字
七年六月卅日ト記セリ相徴スヘキナリ○韓字ノ丁ハ後
ニ略記ス烙印ノ字ハ未考○廿五介ノ木ノ端ニ記セル葛
四介九兩ハ今秤ノ二百七十三分七分五厘也此端記一木
ニ在テ他ニナシ據ルニ凡四木ヲ束テ百介トシ其束葛ノ
重サヲ束中一木ノ端ニ記セルカ三倉古書中宝字六年正
月甲加山作所橋守金弓ノ解文ニ榎榑式佰伍材漕下雇夫
單卅六人六ケ日役功五百卅文人別十五文葛取雇夫二人

功廿文人別十文ト見エタリ漕下ハ六日ノ役葛取ハ一時
ノ役ナレハ取ハ採ノ義ニテ野山ハ葛ヲ採リニ遣ルナル
ハシ同年比造近江石山寺司ノ用進文書ニモ黑葛幾介ト
云事取ト見エタリ○橋ノ字恐クハ橋ノ異字ナルハシ古觀
帖雜 ○法隆寺靈室目錄曰

邦仁天皇帝時寛元元年八月廿三日後法性寺禪定殿下
家道法隆寺宝物自北被渡南時日記云沉水香三具大者
長二尺許 古今日録抄

天平九年牒上合香壹拾陸種丈六分肆種沉水香十兩淺香
三百八十五兩熏陸香卅六兩青木香卅八兩右天平八年歲
次丙子二月廿二日納賜平城宮皇后宮者佛分壹拾種白檀
香四百七兩沉水香六十六兩
法隆寺伽藍縁起并流記資財帳

世尊寺

沉水香目方三百八十目 聖德太子所持二之丁大和國
吉野郡比曾村世尊寺什物十リ

四天王寺

四天王寺縁記 宝物 沉香伍佰兩 淺香四什兩 麝香陸什
介 龍檀香柒佰兩 薰陸香貳什柒佰兩 上宮聖德太子傳抄

大安寺

麝香一升又一筒 重二兩二分 白檀二升八兩三分 佛物 沉香五
十九升一十五兩 佛物五十九升 淺香二十九升六兩三分 佛物

廿四升十四兩三分 薰陸香一百七十一升九兩二分 佛物一
法物四升八兩 丁子香一升八兩 佛物 衣香十兩 佛物百
介法物十七升八兩 青木香七十五升十五兩 佛物七十三升二
二分通物卅三升 和香一九小 佛物 零陵香一升六兩 法物 蘇合香二兩 法物 甘松香一升四兩
法物 藿香二升八兩 法物 右前岡本官御宇天皇以庚子年納
賜者 大安寺資財帳

東大寺

僧鑑真出八十貫錢買得嶺南道採訪使劉巨隣之軍舟一隻
麝香廿劑 沉香甲香甘松香龍腦香瞻唐香安息香棧香零陵
香青木香薰陸香都有六百餘升 唐大和上東征傳
天平勝室六年正月鑑真和上到竹志太宰府四月入京勅遣

正四位下安宿王於羅城門外迎拜慰勞引入東大寺安置供養和上持來天台止觀等文書香藥等物凡和尚持度其員甚多不能目載扶桑畧記

孝謙天皇天平勝室八歲六月奉盧舍那佛種之葉合六十

種麝香卅劑室卅二兩并以前安置堂內供養盧舍那

佛若有緣病苦可用者並知僧綱後聽充用之正倉院古文書

敕封藏麝香五兩進官其代銀提一口施入百五十兩東大寺要錄

敕封藏足施入帳云衰衣香二袋載衰衣香條

阿弥陀院

光仁天皇家萬九千九百九十二年二月依法花寺上座宣酒人内親王宮奉入薰香四袋一衣香一藿香一甘松香

第七韓檀沉香拾肆兩以前宝藏雜物見在無實具以勘錄阿弥陀院宝物目錄

萬福寺

黃蘗山万福寺 欽賜市香一塊掛目六十四支目寺社宝物展覧目錄

法興寺

天智天皇十年十月新羅遣沙飡金万物等進調 是月天皇遣使奉祭裝金鉢象牙沉水香旃檀香及諸珍財於法興寺佛

日本書紀

宮中香事

焚香見經

敏達天皇七年二月耳聰王子年終七歲燒香坡見數百經論
扶桑畧記

焚香誓願

用明天皇二年四月天皇不豫太子不解衣帶日夜侍病擎香
祈請音不絕響

推古天皇二年十一月蘇我大呂誅山代大兄王子條山代大兄王子率諸

王子出自山中入斑鳩寺塔內立大誓願曰吾暗三明之智未
識因果之理然以佛言推之吾等宿業于今可賽吾捨五濁之
身施八逆之呂願魂遊蒼旻之上陰入淨土之蓮擎香爐大誓
香氣郁烈上通雲天三道現種種仙人之形種種伎樂之形種

六畜之形向西飛去日本書紀上宮聖德太子傳補闕記

皇極天皇元年六月大旱七月於大寺南庭嚴佛菩薩像与四

天王像屈請衆僧讀大衆經等于時獲我大目手執香鑪燒香

發願日本書紀扶桑略記東鑑並同

焚香誓盟

天智天皇十年十一月大友皇子在内東西殿織佛像前左大
目獲我赤兄臣右大目臣中目金連獲我果安臣巨勢人臣紀大
人臣侍焉大友皇子手執香爐先起誓盟曰六人同心奉天皇
詔若有違者必被天罰於是左大目獲我赤兄臣等手執香爐
隨次而起泣血誓盟曰臣等五人隨於殿下奉天皇詔若有違
者四天王打天神地祇亦復誅罰三十三天證知此事子孫當
絕家門必亡日本書紀

御香奉神

淳和天皇天長九年五月八省院讀經澍雨不降衆僧暴露中
庭至心誓願午後微雨仰大和等四畿内國司每社充幣料五
色絹各一文名香一两龍形料調布五段令行幣事日本紀畧
仁明天皇嘉祥三年八月遣散位從五位下高原王向豐前筑
前兩國以寶釵明鏡名香線帛等奉八幡宮及香椎廟文德實錄

元正焚香

元日大極殿前庭左右設火鑪榻一脚主殿先進發火爐寮官
人左右各一人進就榻下共燒香一舉畢所須香小六斤十二
兩查預前請受圖書式

焚香祈神

元日拜天地四方料香二兩 延喜中勢式
四方拜條設市座三所一所拜屬星座 在座前 札燒香置華一
所拜天地座 在座前 札置華燒香一所拜陵座 江家次第
三月潔齋 九月 淺香小一兩薰陸小四兩青木香小一兩色紙
四枚右預前月二十五日差定市燈使 延喜中宮式
庭火并平野竈神祭 坐內 神座十二前 各六 名香二兩右每月
癸日之中擇其吉日祭 御本命祭神座廿五前名香廿五兩
右料物前祭請內藏寮每年六度祭之 三元祭神座九前名
香三兩右料物前祭請內藏寮每年三度祭之 延喜陰陽式

焚香祭孔子

釋奠料 春秋並同 名香二兩受藏人所 延喜主殿式

焚香禮佛

國忌齋會五位一人六位已下一人史生一人白寺率諸司史
生四人行事其香每寺十二兩 淺香二兩薰陸二兩青木八兩
正月最勝王經齋會白銅火鑪三口奩八合七十六枚香三斤
淺香七兩薰陸香七兩青木香二斤二兩 又年外度人須須雜香并木火
爐一口木奩二口齋會畢日儲而供之右收寮庫臨幸出用
春秋二季御讀經白銅火爐三口白銅奩八合七十六枚右二
八月請百僧於大極殿三ヶ日修之大體准御齋會
御佛名 寮供紙花香料金銅 右十二月三ヶ夜礼佛供備御在

眼和尚位增命令護王辰勅曰頭痛身熱不可堪忍和尚合眼
祈禱香爐續烟念誦連聲熱惱忽散聖體安慰扶桑畧記

臨終焚香

皇太后歡子者太師藤教通第三之女永義帝之皇后也年十
四就兄淨田法師讀法華等諸經自尔以法華為日課康和四
年八月十八日右手執旒左手把爐向西跏趺奄然而崩年八
十二元亨親書

車綴香囊

三條天皇長和元年十月大嘗祭今九車所家儲也皆是擴柳
毛此中五車口居螺鈿薰爐自餘十五車簷懸香囊是等皆家

儲也 市堂園白記

三條院の大嘗會の市襖の出し車太皇太后宮々々奉ら
せ給へり一の車の口の眉に香囊掛らせして空焼物より進
りしりき二條の大踏烟満りり大鏡

帳中綴香囊

堀河天皇寛治五年十月女市嫗子内親王香囊幸懸市帳中
市枕上方或説懸市下方云々今日不被懸者先例多懸近代
不懸云々後二條園白記

輦中焚香

宗德天皇天治元年正月行幸鳥羽自市輦中薰爐落下馬取

車焚薰香

後宇多天皇弘安十一年七月市禊行幸 出し車色くみ又え
て空焼物の匂ひ心熱くくちり湯てせん 中務内侍日記

貝入薰香

崇徳天皇の四世は頭中将公能朝臣の殿上は一種の物を
出せる糸云 頭中将の一種の物を蛤を籠り入て存様を立
て紅葉を結てりさしり 蛤の中より薰物を入り 籠口是
より殿上の口をさす主政司傳へて大盤におく 既中将
取て人々又賦ら進り 續古事談

後奈良天皇 天文四年三月皇孫院薰物一貝給

天聰集

五月季遠初日薰物十貝遣く

口元年十月左衛門依とくより山曜の事りて阿波の西へりる山相合

の山薰物十貝あり

古湯殿上記

正親町天皇永祿二年五月三條大納言 言 渡河へりるを山曜

物十貝給物々包まきて賜ふ

永祿八年三月武家茶事地後へ後宇多へりる山曜物十貝

給物々器中へりるを山曜物十貝

天正七年二月信長と山曜物十貝

八年九月十一日山曜物十貝給物々包まきて出さるる山曜

物中物々

天正九年正月村井正へ安土の事、旨命之廣格幸とあり、序に二
子や少院二少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

十年閏正月相葉領事、旨命十帖、山陽殿上記少院物十貝下あり、勅所吉新少院
言少院

口月但多のうきやへソ名もんと、花多并少院物十貝幸とあり、山陽殿上記
十四年四月勅所吉新少院物十貝幸とあり、旨命少院物二貝幸とあり、

十五年二月施事院、吉新少院物十貝幸とあり、旨命少院物十貝幸とあり、

十七年正月施事院、吉新少院物十貝下あり、
十日閏月後へ勅所吉新少院物十貝幸とあり、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

十八年二月淡路浮石へ法事代存、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記
使余院、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

三月大和太細、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

五月閏月後へ勅所吉新少院物十貝幸とあり、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

八月禁裏、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

五色五節、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

萬長八年十月將軍江戸へ少院物十貝幸とあり、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

十二年三月高直領事、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

十三年八月福清寺、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

天正十九年二月院、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

萬長八年四月、旨命少院物十貝幸とあり、山陽殿上記

女御入内賜薰物

崇德天皇大治四年正月攝政大相國長女從三位聖子入内
此間所々薰物使叅東三條殿本院使右少將公教朝臣沉打
乱萱蓋銀松枝居鶴其中納薰物又銀小鶴居松枝女院使左
少將季成朝臣沉萱蓋居銀洲濱其上居鴛鴦一双中入薰物
皇后宮使亮實兼朝臣銀松枝作鶴巢入薰物有子鶴掩其上
御硯萱蓋敷薄樣盛長秋記。中右記同
後鳥羽天皇文治六年正月此日攝政大臣長女有入内事先
是立市調度又薰物四種梅花荷葉侍從預仰前大膳大夫家
細調合之彼家傳此藝小一條左大臣師平流也八條院御使
左少將成家朝臣持薰物置余前諸大夫因行出來取薰物進

臺盤所 玉海

土御門天皇養元三年三月攝政前太政大臣長女立子入内條此間院薰物使
右中将通方朝臣来兼隆指笏取薰物昇中門廊進來置薰物
於余座前退齋院薰物使左少将頼房来次第如前皇后宮使
来使右少将資家朝臣取薰物来次第如前
御使右中将通方朝臣銀龜形納薰物居銀莒蓋敷紅薄樣一重
件莒蓋彫透唐草有銀口 皇后宮市使資家朝臣銀龜形納薰物
物 硯莒蓋敷紅薄樣居之 齋院市使頼房朝臣銀龜載蓬菜
形納薰物上立鶴洲濱形上 玉莒

金銀橘盛香

堀河天皇寬治二年二月攝政齋院先獻銀水角之中以金銀
作橘納香藥扶桑畧記

崇德天皇天治元年十月高野市幸條攝政左丞相忠通被獻銀水
角其中以銀作橘各納香藥是寬治例也高野市幸記
樹下集云大入道殿于時大式物あせせし時金の橘乃中し
道雅朝臣于時大式末の世少邊をたりし橘の芳は香のいよ
りしありし 岷江入楚

銀鶴盛香

高倉天皇治承四年七月右大將良通妻父右大臣兼實銀鶴入薰物
為引出物女房取之入車中玉海

銀龜盛香

後白河天皇保元二年十一月右大臣基實自春宮女市殿被
洞進五節奉幣条

獻薰物

銀龜仙之居手
菅蓋敷白薄様

人車記

近衛天皇仁平二年正月新宰相中将師長卿嫁娶備藏人

大夫信國賜薰物為婚官市使向彼家銀龜納薰物居手菅蓋

人車記

後鳥羽天皇元曆元年十月
五月條
自八條院賜童女裝束二具薰物入銀龜並寺札管敷
薄様

銀松樹盛香

高倉天皇康安三年正月兼光系女御殿市方二呂參會彼市
所給贈物退出銀松樹中納薰物瑠璃葉有薰物愚昧記

打枝盛香

光明天皇康永四年八月侍從三位實益卿入來為近衛前關
白使有恩賜為ノ枝又故一枝獻之了指同枝同園大曆
入薰物

後光嚴天皇延文元年八月八朔則被下市返寺枝葛被納薰

物後深心院闍白記

同三年八月上市返撞寺枝被納薰物日

後陽成天皇天正十八年九月毛利宰相八從禁裏寺枝橘

二三成の薰被下其晴豊ノ記

同十九年二月家康ハ市薰物打枝橘五ナリ枝入以テ遣シ

述以日

鴛鴦盛香

崇德天皇長義二年六月中納言中將賴長
要大納言能實女前齋院使憲房有祿件

前齋院薰物入物依院宣下官令圖繪様鴛鴦一雙居銀洲長秋

金虫盛香

後光嚴天皇應安四年八月自三條殿先日由憑由返送給之

香呂 銅一 金ノ虫 二薰 入ノ 祇園執行日記

御即位焚香

天皇即位條 主殿圖書各二人東西就爐燒香儀式 江家次

三ヶ重事云即位の日に大極殿の中階の南七丈をくわて火炉二

あり主殿圖書寮のつらき火炉の下より香を焼く此香ハ天

子位より即ちふよしを天より出さる焼香なり

後光明天皇寛永十年十月市即位今度火炉出来武家周防

守中付以申し沉香大外記調進たらず以故予飛鳥井大納言

へ中沉香十兩束則主殿伊豆ニ渡し生火ニ傳圖書ノきヤ思利

東山天皇貞享四年四月市即位焼香沉寛文三年度大外記

調進外自市所被出品被尋之局勢被申其子細了件香伽羅

やるのききく大外記所羨也 季連記

御座焚香

後鳥羽天皇建久六年十二月弓場始設中央敷二色綾織代

其上立平文市倚子南北立置物机各一脚其中間立風爐一

脚有薰 三長記

御食滌香水

高倉天皇治承二年十月安徳帝自座主宮市壇所被獻香水

并結線等香水入花瓶立檯結線裏紙兩種居折敷一被中

云香水者可被滌供御裏紙物者市産之後可返給云々大進

基親取之獻市前山槐記

御葬禮焚香

後朱雀天皇長元九年五月後一條帝持持龜者四人分立市與

四角藏人以龜居高坏持之燒香者四人相副之各以名香合薰等

雜色二人役之類聚雜例

靈元天皇延宝八年八月後水尾帝清閑寺勸修寺西亞相令

同道舊院へ伺公西黃門云九香爐伽羅州兩令用意畢俊方記

焚香接人

後一條天皇長元六年五月一條院の賀陽院にて内大臣教通泉の

上の渡殿四條中納言定頼急り多る出羽弁對面し

多る殿内より火取材をおとすて空燒物をせせひて了

お川南に榮花物語

賜香祈雨

陽成天皇元慶元年六月是日左弁官權使部素名吉備麻呂

言降雨之術請被給香油紙米等試行之三日之内必令有驗

於是給香一升油一斗紙三百張五色繩各五尺絹一匹土器

等三代實錄

上東門院遺香

高倉天皇長安元年七月東北院掃地燒亡上東門院薰物燒

殘之物等燒失百鍊抄

名香盛手

一條天皇長保元年十二月大皇太后宮先是剃市額髮閉市眼之比名香盛手向西方唱給弥陀宝髻終給

橘盛香

山寺日侍之時五節なる人の枝物香しくありてて之焼物也こし
こころに枝のちりる枝に香を西院に入替て生る如覚法師
玉のせりかりとて終るまじも香の香中を似るくまじ
徳和苑集

諸呂賜香

賜香又載貝入薰香條

平城天皇大同二年正月大唐信物綾錦香藥等斑賜參議已上卿類聚國史

一條天皇長保元年十一月自大右宮子宮被給白絹廿疋薰香一莒右小

後一條天皇寛仁元年十一月参五節舞姫女房六人之自中宮市方給薰物櫛粉等左經記

堀河天皇寛治六年十一月五節舞姫大宮薰苜銀入硯蓋遣中納言許云後二條関白記

同月向五節所之中納言中納言市前給薰如藥袋红花薄様袋也也

後柏原天皇永正六年二月在重朝臣来昨日自 禁裏薰貝
十被畏薄様被纳手箱盖入菅内々可遣義與朝臣之由勅定
也此事為傳仰亦招此朝臣也委細申合之 実隆公記
後奈良天皇天文四年十一月三條中将薰物調合之由申十
兩許給之 天聰集

正親町天皇
永福十三年四月修理見齋之信長多燒物万里小路大納
言して遣在さるゝ一返祝著せらるゝなり 西陽殿上記

天正元年六月一條殿土佐へ下りて水喉乞ふ事あり之色一編
多し議定所よりて水喉面ありて水燒物所報之畏事述て多し
十一月信長よりゆゑに甘露寺少使より水燒物賜ふ 口
四年九月大將へ鷹の返事三條へ下りさるゝ水燒物入り玉
在在さるゝ 口

八年正月二條へ右少弁より水燒物一帖水燒物ありてさるゝ 口

七月右少弁の使より信長より水燒物賜ふ仙人なり 口

十月信長へ勅書と水燒物と梅より述て柳原大納を安土へ下さるゝ

九年二月水燒物黒方村并より中より一書のかきとさるゝ 口

口月長橋少中御物玉橋二貝あり 口

三月續長院二條へ多し序より一書述より玉橋仙人水方遊
在在さるゝ水 口

十四年三月圓白殿水燒物より水燒物大納を少使に 口

後陽成天皇
十七年三月七日大納大納を及頼より勅書大納を及少使より及常
水燒物下さるゝ 口

口十二日水燒物大納を及常より勅書大納を及少使に 口

口三十日水燒物大納合ありて中へ下りて男を遣り下さるゝ 口

のり出るるをこぼりし志の通て可なり 御物語

阿多末高家少将の御物語成志の中物も多し御系 焼物の名白金の
御系香の合さる御物語の通て可なり 口

後一條天皇長元二年四月閏日殿仰言今日殿殿香等分奉
院宮之 左伝記

後湯成天皇長元四年八月大出乳人の縁赤井及より色々の名
香廿五色をよあり 水湯及上記

後深草天皇元年中の御物語の通て可なり 御物語の通て
ありは白ひと黒しうゆりて 弁内侍 御物語の通て
ありは白ひと黒しうゆりて 弁内侍 御物語の通て

薰爐焚香 伏籠司

三條天皇長和元年十月 大嘗會 中秩 今九車所家儲也皆是檜柳毛

此中五車口居螺鈿薰爐 市堂閏白記

土市川天皇長元三年三月 攝政太政大臣 女三子入内系 女房上臈一人取市

知薰籠 取薰衣薰物用 取入車薰籠 中尊庭從女房夜間置火取燒薰 玉葉

龜山天皇文永八年正月 占後深草天皇 市邊系 一番つゝの由引出物御勢

物語の心とそ閑しし 金の地盤と白金の伏籠と薰物との

りして 増鏡

本院侍従の百の内の御物語を及ぶ系 火木のり 行傳 焼して 室 御物語と

思ひき衣 蓋抄 少きこり拂て焼物えめ 宇治拾遺物語 白ひと黒し 語

堀川右大臣顯光公後妻の御物語 大将 行傳 御物語の通て可なり

と冬も火を多らりて埋て薫物多きとゆて少きと亦並てげ
着りふの衣をて暖てそ衣をきりふ 大段

後醍醐天皇寛元四年正月二日相具宰相典侍入来火取
入薫物送彼典侍 圓在園日記

火とりて入て香の合きの焼物籠を焼て小帳の匂くを焚く
底の已りうまいちひなる出ぬる能程と埋てよま沉香を焼
物多くくべて薫ひつて数多居へ御くくまの殿のあういと
つてましてゆくと文もいと 和物語

焚香薰衣

一條天皇長保元年十一月 女市野子の後まきの
馬へ海市の条 亦積ほりさあふたり

して此中方好むいも品とある薫物とのあひまをいふく道の香のり
こそまぬ進むとなく深薫りしゆらさゆて此は移り香にまゆ方くま
似て思ひこほり 葉甘お倍

寛弘六年十一月 三条天皇の御時
の少政の条 此中方よりしきり

白化振させたりとくあうきりて初め白ひ薫るゆも 城 御殿
りぬててまてとくきりさあり 口

後一條天皇寛仁元年十二月 道長の子をいふ
ゆの少政の条 此は薫物たつてえあうぬきこ

と志あうさあ 口

万寿二年正月 白土の御殿
の條 御日さーい進ひ薫る

はかりしは振りて扇をきりて焚物とくま 口

後朱雀天皇廿五年

藤原公成の子の
孝和子と云ふ事

藤原公成の御下

衣の香や焼物の匂、此の香を御下におりしう 匂ふくし、焼物の香を人
結進くしりる。口

白河天皇兼保元年十日

大嘗会に於て藤原公成の
の女を御代に侍奉す事

山吹の香くす、若草の表

若花の香や焼物の匂、此の香を御下におりしう 結進くしりる。口

後宇多天皇建仁元年の比

此の香を御下におりしう

院とて進くしりる

備く、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

すくしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

後小松天皇建仁元年四月

此の香を御下におりしう

山吹の香くす、若草の表

の香や焼物の匂、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

すくしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

後多の王とて建久十年六月

任大臣大臣

女房に於て藤原公成の御下

結進くしりる

之の香や焼物の匂、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

思ひ人のめてくしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

すくしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

新て古歌くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

おて少焼物もさきせり。口

橋の上は女房のしる、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

橋の海濱もあ、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

中物をも表の匂へき、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

玲々しく、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

少方へき、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

焼物の匂、此の香を御下におりしう 結進くしりる、此の香を御下におりしう 結進くしりる

夜宮盛香

四月更衣條 侍人この料子之綾絹紅之類は之類にして
衣箱より之種々の焼物とて以て進呈し之類 漢和中細言物語

焚香薰人

宗祇善焚香又自愛鬢每以香而薰人問其故對云吾非愛鬢
愛香之氣常在焉 西工便覽

贈薰香

後一條天皇寬仁元年十一月五節人々志薰香 市堂園白記

三條天皇寬弘六年十一月秋舞姫人々送薰香 日

堀河天皇寬治五年十一月五節所々自殿大盤遣薰物者 二後

條園白記

崇德天皇大治四年四月 賀茂祭奇 新院 市使左少將公教朝

目參來薰物巾扇被進

後相原天皇大永六年二月夢菴書狀黑方一貝被送之 實隆

後奈良天皇享福元年二月及晚重明薰物 黑方一貝持來 日記

後小松天皇應永十年二月送薰物一於柵尾是故林衆明後

日相當五旬之故也 兼敷卿記

順德天皇建曆二年九月頼資來五節可燃薄樣薰物可申請

由以便宜可申脩明門院者申承之由 十一月五節大進兼
隆持薰物未置裝束北方薛繪硯蓋上置火取一有薰物又
有銀古也必教薄樣也 玉葉

後陽成天皇慶長三年正月燒物三香管太刀馬江戶中香志納言
遣 信尹日記

四月伊達政宗入夜來燒物遣之 口

八年二月片桐市正八燒物錫香箱一遣主膳八燒物遣之
時慶卿記

九年閏八月伏見八將軍市下國市暇乞二諸之家門跡古越少
納言儀：拈出燒物錫ノ香箱二入進上口

十月伏見殿市內儀八燒物錫ノ香箱二入進上 口

十年二月北政所殿八年頭市禮也杉原十帖燒物錫ノ香箱

二入進上 口

十八年正月大坂下向市正八市禮二行杉原十帖錫香合薰
物遣之時直薰物錫器二入進上 口

三月登城駿府薰物一器 口

四月羽柴陸奥守政宗宿八禮二出薰香錫香合一遣 口

同日登城江戶有對面太刀目錄也薰香錫香合二市臺八杉

原州帖薰物一器 口

後水尾天皇元和七年二月鴻津薩摩守八見廻時直八燒物
二香合也日時二行 口

十二月小堀遠江守八錫香合薰物一遣 口

四年四月將軍水禮二出女市八杉原十帖薰香二香合也

寬永五年二月宇和野侍後明日下國卜也仍門進行春日野

百片薰物錫香合一金銀ノ貼紙ニ入庭ニテ對顔
同月仙臺中納言ハ返事認持遠里方一香合春日野百片相
添也

靈元天皇寛文五年三月從伊豫与薰物一香箱給 重房記

同日從難波中將禱上下里方 一香 為餞別為持給 日

七年四月從攝政政古調合之薰物一香 玉栴 令拜敷給 日

後陽成天皇長永六年三月 進物 西尾豊後之權物香篋也 信子

後光明天皇寛永七年十月為餞酒并讃州毛氈五枚燒物一

香篋也之松平定州毛氈之枚燒物一香篋也之 高嗣之記

靈元天皇延宝六年十月日光門跡京都御所ノ水財產トシテ勅

方此薰物五種進上也 玉露叢

同 盛貝

後陽成天皇慶長五年二月加後生計ハ言傳ノ文書ノ燒物貝一香
以安國寺ニ進燒物一貝也毛利輝元ハ方ノ燒物ノ貝一香ノ望田兵
部ノ燒物一貝也

口月臨津兵衛路ハ名也之藤原朝ノ後初也燒物一貝也

七年正月秀頼ハ燒物大貝一香也此母儀ハ燒物一貝也入斤相之贈

正ノ口燒物也

三月津輕守田由儀ハ燒物大貝一香也上野志摩守ハ燒物一香也

九月依見ハ成金物ハ燒物二貝也 忠房 内府被書達

八年十二月吉野ハ初ノ上ノ後堂御非為ノ上筋ハ松二ツ燒物大貝也

廣曾親刻結手引付金物板高十帖燒物ハ湯香篋ニ入一香ニシテ是

上野君ノ口也家ノ口但燒物ハ大貝也 以上時夢之記

慶長十二年二月於大坂秀頼公に
松系十帖一本水袋櫃へ白香十只
全額納入交也大坂公殿へ曰事白香十只全額上也 梵衆記
十五年正月於大坂秀頼公へ曰事
中入松系十帖一本水袋櫃へ白香
十只 全額納入 大坂公殿へ白香十只 詰口 全額上也 口
二月 福清寺へ伏見へ上致し松系十帖蓋物二只等々 時夢日記
一條天皇長保元年十一月左府使為義朝臣被賜蓋物納額等
不右記

年の始の庚申此初申時吉運の御宗 既申時白くは松系十帖を
くは物御の遠くくは松系十帖をくは物御の
花の座櫃のくは香ありとくは蓋物二帖をくは母方より一日の
もきりくはくは物御の香ありとくは蓋物二帖をくは
依のくはより父方より送くは物御の香ありとくは蓋物二帖をくは
物御の蓋物のくは全額物御のくは蓋物二帖をくは蓋物二帖をくは
くは物御の香ありとくは蓋物二帖をくは蓋物二帖をくは
お守りの許き無刻の言へ贈物系 多能くは物御の蓋物二帖をくは蓋物二帖をくは
くは物御の香ありとくは蓋物二帖をくは蓋物二帖をくは

原は物御

薰香作山

三月三日種松節供侍りたる事 宮より種松の女君分梅物を山の
くまひりてこまめ枝は白くまめ梅咲きて三双へ 河物語

内古家の設き物なを好なりき事なる事 大いなる海をさして蓬萊
の山より松の根を香をさしき 況に入るる山を黒方侍は蓬萊香
分梅物とまをまをいり 口

薰香作鳴

京のつとをききたる事 海のつとを白く白く枝をいりて分梅物を
のこまめー況の枝は白く香を付て況は種葉をいり 口

薰香作者

後堀川天皇寛長三年三月 為六方違好幸
於河況殿 太相儀以造蓬萊之又
造派実重詔坏小土菩等 金柳薰物為者皆召集細工等 今日

宮中燭香 或十炷香

後土市門天皇明應七年三月小出所^ノ之^ニ連歌梅花燭香
亦合世 小出殿上祀下口

延應元年二月^御伏見殿^御六室妙法院^御文^御聯輝^御七^御世^御之^御小出
所^御之^御十^御炷^御香^御亦^御有^御也 口

後柏系天皇文永三年正月於^御所^御有^御十^御炷^御香^御火^御下^御祀 元長日記

二月及^御後^御系^御内^御有^御十^御炷^御香^御火^御亦^御有^御也 口
之^御至^御予^御十二^御人^御也 口

後土市門天皇文永八年八月^御初^御二^御入^御り^御俄^御ニ^御十^御炷^御香^御亦^御有^御也^御然^御アル^御ハ^御キ^御ト^御テ^御亦^御有^御也^御
之^御予^御之^御モ^御召^御サレ^御沉^御ヲ^御切^御セ^御ラレ^御拵^御ヘ^御サ^御セ^御ラ^御ル^御也^御勿^御苗^御モ^御拵^御ヘ^御ラ^御レ^御則^御始^御ル^御也^御
人^御教^御亦^御有^御也^御伏^御見^御殿^御拵^御升^御上^御之^御前^御大^御僧^御新^御曲^御侍^御亦^御有^御也^御勿^御苗^御内^御侍^御之^御始^御
等^御亦^御有^御也^御亦^御有^御也^御拵^御升^御上^御之^御前^御大^御僧^御亦^御有^御也^御勿^御苗^御内^御侍^御之^御始^御
等^御亦^御有^御也^御亦^御有^御也^御拵^御升^御上^御之^御前^御大^御僧^御亦^御有^御也^御勿^御苗^御内^御侍^御之^御始^御

後山所記 言國心記

去華命

十一年三月今秋有十炬香予新中物之量先尤在并入通寂養元長留
 就切臣位通清房飯尾表其夢心亦有十系量量款應亦人新也親書
 十二年八月廿日親王出方三戶二口リウ子二名香也後及三戶山口也亦人教
 親王出方檢典侍馬也今系予永宣也相海也也遊了 言國心記
 神光天皇應永世二年十月今日由表十種也香人人多集入 薩成記
 後土出門天皇文昭七年三月十炬香 香亦無外教國心予後量相臣
 以是著系在教外也中亦此供也入規 言國心記
 十六年二月自禁裏解者言 十炬香也佳妙也物 故信也言中亦亦方之由
 不系 口

口月有十炬香 口

三月十炬香簡十具 親王出方 言一曰禁裏五具漆筆了 口

口月有十炬香 口

長亨二年三月於中物亦有十炬香通世相臣以下注也 口

延應二年正月今日親王出方例年中物也言一之上海也或初也言也系
 源去物也以下數輩從供十種系十炬香之及于與教然及源文正也了
 法相系天皇明應十年八月依首多由十炬香記六多一書也方仰
 以書之出人教或初也言 藤輝朝方相朝信送大物之右也心也 攝系
 予 源中物中物 帶字也 中物也 豐房切也 贈也 也初也 一最又沉
 宗山也初也 元也心記

實性也言於之言有十炬香事伏見殿藤輝朝方相朝下及攝系右
 要門也言中物也 源中物也 朝中物也 守也 豐房切也 以上十二人
 也 魚物於系十帖亦陶文沉 一也言一 系相朝八炬一也教也 賜也
 了 予五種身孔 初也不及也念此無也

貴賤十燈香

後醍醐天皇建武元年八月の此二燈河原の落書云 茶香十燈ノ

寄合云 經舍初ニ有座ト都ハイト、倍増ス 建武記

建武元年正月 今秋也 貴中終教也十燈香 政承記

二月 終教也十燈香

閏二月 貴中終教也十燈香

二年二月 閏十燈香

廿九日 香煙却居来入秋閏十燈香

十一日 室地院依而今夕從還也入秋有十燈香也

十二日 入秋藤書高書至云信教隆云信教于来閏十燈香

又明年正月 入秋有十燈香

五月 入秋閏十燈香

十七年九月 入秋室門之系有十燈香

十八年九月 入秋有十燈香

延徳元年正月 入秋冷泉新門書也十燈香

口月 日次和漢多也 國自之来至外人教也 國日之秋今抑寫閏十燈香

三年正月 入秋万杉形之来有至初次閏十燈香

以重二年正月 閏十燈香

二月 入秋有十燈香 貴中連秋有世事終及之

三月 入秋有十燈香事

四年二月 入秋有十燈香

五年二月 於室日方閏十燈香

六年四月 叶日字紙乃唯乞来名 命而香包二扇系終

後柏系天皇以重十年正月之秋有唐字也十燈香

十月入秋野原氏香十種香也 野原氏記下口

二月^{二〇}入秋野原氏香 五^{二〇}入秋野原氏香 七^{二〇}入秋野原氏香 野原氏香

三月^{九〇}入秋野原氏香 十二^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

四月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

五月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

六月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

七月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

八月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

九月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

十月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

十一月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

十二月^{九〇}入秋野原氏香 野原氏香

十七年三月有十種香 尚通之記

十六年二月入秋野原氏香十種香也 野原氏香

大永元年十月入秋野原氏香十種香也 野原氏香

後土正天皇文永十三年二月有十種香也 野原氏香

入秋野原氏香 野原氏香

長門也 野原氏香

長門也 野原氏香

長門也 野原氏香

長門也 野原氏香

長門也 野原氏香

長門也 野原氏香

正親町天皇永福元年二月黒方之由少相合一由大典侍及中入菊
花一由少相合有

二年三月世務及少中入少少少相合有黒方有

三年十一月三条院中相 宣福 新枕少相合有

四月少中入新枕黒方少相合有

十三年四月仙人一由合を信長と世をよる

天正八年四月黒方一由少相合有

四月 黒方一由少相合有

七月 少相和里方少相合有

八月 少相和里方二由合をよる

十一月 黒方二由合をよる

九年二月 少相和里方少相合

四月 新枕五相一由少相合有

五月 黒方二由少相合有

後湯成天皇天正十八年三月陣の勅使廿九日少中入とて 田の及へのり

五重少相和里方を相へらる少相とて少相も山に於て少相とて

五月少相和里方とて少相とて少相とて

其在四年四月 少相とて少相とて少相とて

四月 少相和里方少相合有

五年四月 少相和里方少相合有

四月 少相和里方少相合有 以上
席湯

殿上記但平奉香名
者悉除之

僧侶香事

焚香祈雨

清和天皇貞觀十七年六月黑雲四合俄而微雨雷數聲小選
間霽先是名山僧名聖慧自言有致雨之法中聖慧於西山寂
頂挑批紙米供天祭地投體於地懇懃祈請如卅三日油雲觸
石山中遍雨 三代實錄

延喜の市時旱魃しりりり 靜觀僧正の仰下さる、振方くし
市祈ともさせり 験あり取分仰付る也この仰下さるは、靜觀面目
限りあつて南殿の市階より障子て屏の下に北向に立てて香炉取く
むりて額に香炉をさめて祈請しりりり 香炉の烟空へ揚りて扇を
己の黒雲大空に引塞きて電光大千界に満ち車軸の如くなる雨
降て帝大臣と御等隨在して僧都に為し給へり 宇治拾遺物語

釋寬空姓文室氏內州人事神日為弟子又稟寬平上皇密灌
天曆帝勅修祈雨法過期不雨君臣潛笑空乃著法服捧香炉
入宮庭立焚香誦咒密觀須臾于時陰雲忽起大雨暴降然宮
城而已不到他所時人奇之元亨教書仁和寺傳著聞集曰
教子觀姓橘氏入園城寺學顯密教應和二年夏旱朝議勅觀
祈雨觀時居攝州箕面山中使到菴宣旨菴之後三里有大灑
觀將宣使至灑所上柳樹手擎香炉啓白持念于時炉煙聳騰
滿山谷黑雲相和甘雨大灑觀及官使霑衣而歸元亨教書
後一條天皇長和五年六月畧深覺僧都獨自向神泉苑祈雨
畧香炉燒香懇切祈請臨晚大雨雷鳴翌日歸禪林寺之畧時
人隨喜而已小右記

釋長信大相國道長藤公子刺戒後拜性信親王傳灌頂密印

中治曆元年七月畿甸旱勅信祈雩率二十僧於神泉苑修孔
雀經法至期不雨奏延三日於是文武百官持華齋香陪於泉
苑應時大雨霑衣而歸高僧傳

釋成尋參議藤佐理之子寬弘八年生七歲入嵩嶽大雲寺師
事族兄文慶常有圖南之志延久四年乘宋舶入宋國當溱寧
五年矣六年夏天下大旱帝聞尋善密教就瑤津亭建壇祈雨
第三日夜雷雨達旦中使慰勞宣曰當修至七日霑洽率土
兼旨再禱大雨三日帝幸壇燒香翌日內賜茶果達觀後十餘
日賜號善慧大師高僧傳明正畧傳同

香水治病

釋性信三條帝第四子藤亞相師忠之妻病熱如火信乃授戒

咒漂香水熬散尋愈 高僧傳古事談同

釋覺鏡姓平氏肥之前州人入京投仁和寺密學支法無不研
寔初天仁上皇不豫私祈弘法大師上皇夢一沙門自南方來
手執柳枝漂香水覺後病差適謁宮門見鏡儀狀宛如夢僧宣
問從來敬崇日熾 元亨欵書

釋延朗姓源氏 畧中 投圍城永澄學台教翌歲出家丹州官吏盛
時渾家凍時疾二女已死徒僕皆卧相語曰非朗公加持我等
不起懇乞朗以香水漂生飯与之諸病人啜之皆愈二女已亡
三日漂香水而獲 同

香水漂房內

釋唯衆台嶺學徒長養四年三月十八日命用小浴以香水漂

房內翌朝勸告門弟同志曰我今辭婆婆詣淨土面別在茲若
過剎那生處應定念佛唱滅矣 高僧傳

香水避火

如意尼者天長帝之次妃也丹州余佐鄉人不沐浴體無垢天
香自然不用薰染持如意輪咒為日課山西一峯有大鷲鳥黑
雲覆峯時日出燄一時炎燄飛來遍堂宇妃以香水漂之其火
自退 元亨欵書

軀體馨香

釋善淵世姓阿氏和州高市郡人其父無子祈觀自在像一夕
聞鬼吼出見之紫蘿上有一包香氣芬郁聞而見之小鬼也父

母喜而收養不數日而長後出家 下畧 元亨教書

薰染絲縷

釋俊苒肥之後州飽田郡人建久十年五月初著宋之江陰軍秀州周氏妻產數子而其兒皆夭又孕焉已經三年未誕劇苦不可言也苒到周家修七佛藥師法孺人身體奕健召姆探胎姆曰無孕事合家嘆異孺人乃以三千緡買衆香薰染絲縷者三年矣沐浴潔齋著淨衣繡彌陀觀音勢至像報苒絲縷莊嚴光曜奪目開展之日奇香發越苒携歸与建仁西公西獻元曆上皇 元亨教書撮要

死時焚香

釋開成光仁帝子桓武之兄也天平神護元年正月一日潛出

宮入勝尾山疊石為塔禪宴其側天應元年十月四日手執香爐向西低頭而寂壽五十八 元亨教書

宇多天皇寬平三年十月廿九日天台座主少僧都四珍入寂廿八日和尚忽自唱門人云十方聖衆雲集我房汝等早應掃灑房舍排批香華如世口唱叉手左右相揖再三也 扶桑略記

醍醐天皇延喜十八年十二月相應和上称佛堂近更迂遠室燒香散花向於西方唱弥陀名容貌儼於尋常音聲雅於他日望日夜半右脇入滅 同

延長五年十一月僧正增命入滅洒掃一室告門弟子曰人生有限本尊導我汝等不可近居和尚禮拜西方舍阿弥陀佛燒香倚几曉更世刻如眠氣止 口

釋睿桓居台嶺學教觀兼持法華臨終手執香炉誦法華端坐

而逝 元尊教書

釋光勝不言姓氏為沙彌時自稱空也天曆二年四月上天台
山從座主延昌得度天祿三年九月十一日入滅臨亡時著淨
衣執香炉端坐語門人曰無量聖眾來迎滿空語已氣絕而手
中香炉不傾時香氣滿空 口

修法賜諸香

因融天皇天延元年五月僧都令奏云以孔雀經法可奉仕云
々孔雀經市修法七ヶ日支度大僧所名香々々白膠香紫鑲
安息香薰陸香沉香白檀香龍腦香蘇蜜々々白芥子孔雀尾
五莖五色糸一條長各三丈五尺 親信記
一條天皇長保二年九月造内裏申請安鎮法料條 名香十

種可渡行事所之由此中沉鬱金龍腦安息丁子薰陸昨夕自
院所被奉 權記

太元御修法所請雜香丁子香十兩白檀香十兩淺香十兩薰
陸香十兩安息香十兩百和香十兩青木香十兩苓陵香十兩
以上減定所給之法也内藏寮取件文付藏人從納殿給之

真言院御修法所請雜香龍腦香十兩丁子香十兩沉香十兩
白檀香十兩薰陸香十兩以上半減給之從納殿下之 西宮記
尊勝御修法一七ヶ日每日護摩料黑沉香白檀安息薰陸丁

子春記

久安三年十月十日注進尊勝御修法一七ヶ日支度事名香
白檀五香龍腦鬱金白檀麝香沉香 每日護摩料黑沉香白
檀安息薰陸丁子 每月十五日護摩料沉白檀紫檀煎香安

息丁子薰陸日松霍香苓陵香乳頭香龍腦荳蔻白芥子

○年月不詳注進尊勝市修法一七ヶ日支度事五香○年月不詳今日略入 每日謹

摩料黑沉香燒香料白檀香塗香料安息薰陸丁子 每月十五日

護摩料○年月不詳今日略入

嘉永二年十月六日注進五宝五藥五香五穀事一息灾香藥

五香沉水白檀龍腦薰陸白膠香一增益香藥五香白檀鬱金

種合丁子青木香一敬愛香藥五香沉白檀龍腦薰陸麝香一

調伏香藥五香黑沉水丁子麝香安息甲香一尊勝市修法香

藥沉燒香料白檀塗香料一每月十五日護摩料○年月不詳今日略入

仁平三年閏十二月二日注進尊勝市修法一七ヶ日支度五

香龍腦鬱金白檀麝香沉香護摩料沉香燒香料白檀香塗香料安

息薰陸丁子

天仁二年注進尊勝市修法一七ヶ日支度事五香○年月不詳每日

護摩料○年月不詳今日略入 每月十五日護摩料○年月不詳今日略入 以上春記與書

順德天皇養久三年正月於禁中被始行七佛藥師法大河闍

梨城與寺宮僧正市房名香沉白檀丁子鬱金七佛藥師市修法記

賜市布施

陽成天皇元慶四年十二月太上天皇崩市後初七分遣使者

於七ヶ寺修轉念功德從四位下行權左中辨木工頭藤原朝

臣春景內藏允一人為粟田寺齋佛布施名香一介細屯綿一

連僧布施調綿二百屯三代實錄

後醍醐天皇元應二年十二月澄俊僧都參之間俄故院宸筆

六字名号并阿弥陀經被供養三々下礼盤之間自簾中被出

布施 名香入瑠璃臺 取之退出

崇德天皇長養三年十月 女院市讀經 予中云銀苔入薰若麝

香給者有便宜欽仰云給薰物者有何事 長教記

賜香油

淳和天皇天長四年正月差内舍人令持香油向于十禪師正
忠等住寺 類聚回史

焚香修法

朱雀天皇天慶三年正月有勅遣延曆寺阿闍梨明達於美乃
国中山南神宮寺令修調伏四天王法擢授内供奉十禪師于
時燒香之煙遍滿寺中助修僧侶卅人各掩其鼻 扶桑畧記

